

○マラリア体験

赴任1年目の12月のことだった。妻の発熱が、ずっと続いた。言葉がわからないので自分たちだけでは病院に行けず、ポルトガル語のわかる方をお願いして、連れて行ってもらわなければならなかった。

先輩からは「日本の薬は穏やかに効くが、ブラジルの薬は強く効く。処方量の半分服用した方がいい。」とアドバイスもあっていたので、病院受診に対して不安もあった。

ということで、「ブラジルのかぜだろう」としばらく様子を見ることにした。日本から薬を持参していたが、病名がはっきりわからなかったので薬の使用も躊躇していた。

妻の熱は朝からは上がらなかったので、スクールバスで登下校する子どもの朝夕の送迎、親子3人分の弁当作りという生活を続けていたが、夕方にはいつも同じ時刻に38~39まで上がり、ひどい悪寒に襲われていた。そんな生活が1週間~10日続いた後の土曜日、頭痛と悪寒でとうとうがまんできなくなった妻は、学校にいる私に「助けて」と電話を掛けてきた。このとき、体温は42だった。

電話を掛けるといっても、受話器を取ってもすぐダイヤルできる状態にはならず、しばらく待たなければならない。ダイヤルしたからといってもすぐにはつながらない。何度も何度も、掛けなければならない。高熱の中で、妻はやっとのことで電話してきたようだった。

電話を受けた私は、直ちに事務職員のYさんに頼んでいっしょに私の家へ行き、妻を病院へ連れて行った。妻は即入院となった。(この日は妻の誕生日だった)

その後、Yさんに妻の着替えを頼んだ際、「あなたも気をつけなさいよ」と言われ、「はい」と元気よく答えた。

しかし、その数分後、私は急に頭がふらついてきて、座り込んでしまった。天井がグルグル回って、わずか2~3m先の電話機まで歩いていけず、転がるようにして電話にたどり着き、何度も掛け直してつながった電話に、私は「Yさん助けて」とひとこと言うのが精一杯だった。

病院で診察を受けた私も、40近くの熱だった。結局、私も妻の後を追うように、即入院となってしまった。

入院2日後の血液検査により、「マラリア」だとわかった。遅くなったのは、「医師が日本人のマラリア感染を疑わなかった」、「妻が入院前に解熱剤を飲んでおり、薬を飲んで」と検査結果に現れにくかった」という理由だった。

マラリアはハマダラ蚊によって感染し、治療は政府より支給されるキニーネの服用と点滴だけだった。

クーラー無しの大部屋で、扇風機しかなく、ベッドはビニール外装の柔らかいマットの上にシーツを敷いたもので体が沈み込むため、よけいに暑さ・熱さを感じた。最初は病院のブラジル食を食べていたが、下痢が続き、食欲がなくなり、40を超える高熱のため体の節々は痛くなり、マラリア特有の周期的な激しい悪寒に襲われる等、どん底の状態に陥っていった。

途中でクーラー付きの個室が空いたので、車いすで移動した際、先に着いた私は重篤状態であったにも関わらず、寝心地の良さそうなベッドの方に潜り込んでしまった。

数日後、少し回復して室内を見渡すと、私は病人用のベッド、妻は付き添い用の簡易ベッドに寝ていることに気づき、すぐ交代を申し出た。どん底状態だったとは言え、妻のことを全く考えなかった私は、とても申し訳なかった。

入院中、昼間は派遣教員の奥様に、夜はポルトガル語のわかる日系女性の方に付き添っていただいた。汗が出る度に体を拭いてもらったり、トイレに行く度に点滴の器具を持って付き添ってもらったり、食欲が全くなってしまうため朝昼晩とおかゆ等の日本的な食事を差し入れていただいたりと、献身的な看護をしていただいた。

私は、食事や水が全くのどを通らなくなっていった。付

き添いの奥様から、「この水を飲まないで死んでしましますよ」と言われて、やっと1さじの水を飲んだ。まさに、命の水だった。

さらに、私には入院中にとても恐ろしい出来事が降りかかった。点滴の容器を取り替える度に点滴の管の中に空気の泡が入ってきたのだ。「血管に空気が入ると死んでしまう」と聞いていた私にとって、自分に向かって点滴の管を進んでくる空気の泡はまるで爆弾の導火線の火のようなものだった。看護師さんにポルトガル語で状況をきちんと伝えることもできず、ただ「ア！ア！ア！」としか言えなかった。ポルトガル語で「ア」とは空気の意味だ。英語のairと似ている。アルゼンチンの首都 Buenos Aires はスペイン語で『よい空気』という意味だ。

泡が注射針まで近づいて来た時、思わず点滴の管を摘んで泡が入らないようにしたが、摘んでいるのも限界があり、「ああ、もうだめだ」とあきらめて手を離し、「5,4,3...」と秒読みを始めた。しかし、生きていたのだ。

学校では「中野は、点滴の管の空気に異常に怯えている。」と言われたそうだが、点滴の空気は体に入らないということを入院中には誰も教えてくれなかった。早くわかれば、あんなに苦しまなくてすんだものを...

笑い話のようなできごとだったが、マラリアに打ちのめされていた私にとっては、十分すぎるほど怖い経験だった。

○母は強し

入院当日、登校していた娘には、「おかあさんを病院に連れて行く」と言ったまま(息子は幼稚園) 私たち夫婦は1週間もの間帰らなかった。同僚の先生宅で預かってもらったそうだが、入院中の私には子どもたちのことを考える余裕は全くなく、子どもたちも不安な心境だったと思う。

マラリアの入院中、過酷な苦しみから逃げようと、私は安楽死ばかりを考えていた。

しかし、妻は早く回復して子どもたちの世話をすることを考えていたようだ。検査の結果では菌の数は妻の方が多かったのだが、まさに『母は強し』だった。

ポルトガル語
ボソジーア 初めて覚えた ポルトガス (児童作)

ポルトガル語
ジャヘア 入院して覚えた ポルトガス (中野作)

○温かい心

マラリアで1週間入院したが、同僚の先生方の家族ぐるみの献身的なお世話や日系の方々のおかげで、無事に退院することができた。

退院後、1週間自宅療養をしていたら、妻から「もうそろそろ勤めに出たら！」と強く説得され、「まだフラフラする」と言いながらしぶしぶ出勤した。

その後約1カ月の間は、徹夜明けのような頭にモヤがかかった感じでフラフラした状態がずっと続き、思考や記憶の機能がとても低下しているのを自覚症状として感じていた。高熱のダメージのすごさをまざまざと体験した。なんとか普通の生活を送れるようになるまで、さらに1カ月かかった。

きちんと治療をしたのでマラリアは完治し、その後は再発していない。しかし、日本の法律では、献血できない。

生まれて初めての生死をさまようようなつらい経験をしたが、派遣教員、現地採用職員、日系の方々の温かい心に触れることができたことはとても貴重な経験だった。

日本でなら親、兄弟、親戚とすぐ頼るところだが、海外ではそれぞれの家族がお互いに助け合いながら生きていくことが必要だなあとつくづく感じた。お世話になったことに対するお礼を伝えたら、「次の人に返してあげてください。」とやさしくおっしゃっていただいた。

3年目には息子がA型肝炎に感染し、私も肝炎に似た症状が出た。我が家もよくよく病気には縁があるなあ。」と

あきれたが、小2と幼児の2人の4人家族の企業の方もご夫婦で相次いで、A型肝炎にかかれた。

その企業は日本からの派遣が2家族だったので、我が家も何度か食事のお世話をさせていただいた。私達が受けた恩を少しでも次の方に伝えることができ、少しホッとした。

○日本人の心にふれる

ブラジルには日本から多くの方が移住されており、マナウスにも私が生まれた頃に移住された方がたくさんおられた。そのような方々と、マラリアをきっかけに付き合いが始まった。

移住当時の話を聞くと、想像を絶する地獄のような厳しい生活だったそうだ。私たちはマラリアに感染しても入院して薬や点滴で治療を受け、さらには食欲がない時はおかゆまで準備していただいた。それでも、私は激しい苦しみに襲われ、何度も安楽死を考えた。

戦後まもなくの移住当時は、薬や食料は十分ではなかった。

ジャングルを切り開いて畑を作っている時、マラリアに感染してもずっと寝ている訳にはいかず、周期的な激しい悪寒のあい間に、起き上がって開墾作業をされたそうだ。

そのものすごい精神力は、想像もつかない。

その方々の苦労のおかげで、私たちはマナウスで大きな苦しさを感ぜない生活を送ることができたのだ。



今チェーンソー、昔は斧



開墾作業のため寝泊まりする小屋



大木だけが焼け残った焼き畑

移住者には農家の方が多く、時々遊びに行くといろいろと生活の相談にのってくださったり、新鮮な卵や野菜、果物などを分けていただいたりした。また、ブラジルのお菓子や料理の作り方も教えてくださった。みなさん、とても礼儀正しく親切で、日本に住んでいる日本人よりもっと『日本人の心のふるさと』といった考え方をしておられたことだ。ブラジルで、今の日本からだんだんと薄れていっているほんとうの『日本の魂』に出会ったような気がした。

ブラジルではセルヴェージャ（ビール）を飲む時に「Saude」と言う。この言葉には「乾杯」の他に、『健康』という意味がある。心身の健康は何よりも大切だと痛感したので、マナウスの体験談に『Saude』と名付けた。

○退院後のさらなる試練

マラリアで入院した後の自宅療養中、「日本食が輸入された」というとってもうれしい情報が入った。

マナウスはアマゾン川河口のベレーンから遡ること2000km、日本人移住者が多いサンパウロからも飛行機で4時間の『陸の孤島』で、海の魚とは無縁の地だった。日本食の輸入もごくわずかで、日本の定価の3倍以上だった。病後に加えて日本食入手困難という状況だったので、『日本食入荷』はとて魅力的な情報だった。

絶好の機会を絶対に逃してはならないと病後のふらつく体で店に行き、冷凍明太子3kg2箱、冷凍サンマ30匹...と、貪るように買いあさった。

「さあ、久々の日本食だ。日本食もどきではない、ほんとうの日本食だ。これで元気を取り戻せるぞ。」と意気揚々と自宅に戻った私たち夫婦を待ち構えていたのは、狭い冷凍庫だった。

「あっ!!! 入らない。」

そうなのだ。冷凍庫の容量なんか全く考えずに、大量に買い込んでしまったのだ。冷蔵庫内の狭い冷凍室では、無理だった。冷凍室がとて狭くて明太子やサンマが入らないため、しかたなく大容量の冷凍庫を買いに行った。

しかし、ポルトガル語で冷凍庫は何と言うのか調べもせず慌てて行ったので、冷凍庫らしきものにたどり着くのがこれまた困難だった。

やっとめぼしいものを見つけて買ったら、店員さんがなんと「今日は、配達できない。」と言った。私は「今日要るんだ。」と強く主張したが、「配達の手が都合つかない。」と、空しい返事ばかり。

「ああ、あの明太子とサンマはどうなるんだ。このままじゃ、うちに帰れない。」と落ち込んだ私に、店員さんから提案があった。「アマゾン川の港付近の市場には、物資を運ぶトラックがいる。それを借りたらいい。」と。

「それしかない。しかし、私にはトラックで運んでくれとお願いする語学力はない。しかも、病後で気力&体力ともどん底の状態である。どうしよう。そうだ、この店員さんをいっしょに連れて行こう。」と考え、渋る店員の手を握って市場まで引っ張って行った。

ふらつく体で40近い熱帯雨林気候の蒸し暑さの中を歩くのは、とても過酷だった。タクシーもあったのだが、そのときは、思い浮かべることすらできなかった。

なんとかトラックの交渉が成立して冷凍庫を我が家まで運んでもらったので、おおいにチップをはずんだ。

彼らが帰った後、冷凍庫の電気プラグをコンセントに差し込もうとしたら、なんとプラグがポロッと落ちた。不良品だった。よくあることだった。

再度、店に行く気力&体力は残っていなかったので、家中を探し回って他の電気製品のプラグを外して取り替え、やっとのことで明太子とサンマの居場所を確保することができた。